

認知発達理論分科会 2021年度 活動報告

今年度は、オンラインで開催された日本発達心理学会第32回大会において、2021年3月30日13:30～15:30に、認知発達理論分科会の幹事が中心となり企画したラウンドテーブルを開催した。参加者は68名で、活発な議論が行われた。内容の詳細は下記のとおりである。

テーマ : 認知発達における連続的・非連続的視点の統合的解釈を目指して

企画 : 認知発達理論分科会

司会 : 高平小百合 (玉川大学)

話題提供者 : 浅川淳司 (金沢大学)・木村美奈子 (名城大学)・布施光代 (明星大学)

指定討論者 : 杉村伸一郎 (広島大学)・小島康次 (札幌保健医療大学)

【企画主旨】

発達の変化は連続的か非連続的かという問いは、発達の变化の性質(プロセス)を明らかにする上でも、発達の变化の本質(メカニズム)を探究する上でも重要であると思われる。また、発達を連続と見るか非連続と見るかは、発達の变化の記述と説明という研究上の問題にとどまらず、子育てやその支援、保育や教育などに対する考え方と実践にも影響を及ぼしていると考えられる。しかし、連続・非連続の論争は、両者で取り上げる発達の側面が異なっているだけの疑似問題に過ぎない可能性もある。だがそうでないならば、これまで対立的に語られることが多かった発達における2つの見方を、どのように総合して理解すればよいのであろうか。

ピアジェ理論は、機能的連続、構造的非連続と考えられている。また、コネクショニズムやダイナミックシステムズアプローチでは、連続的な変化から非連続的(非線形的)な変化が生じることが示されている。しかしながら、認知発達の多くの領域においては、2つの見方が十分に整理されているとは言い難い。そこで、このラウンドテーブルでは、数量能力、外的表象理解、生命概念という3つの領域からの話題提供に基づき、連続的・非連続的視点の統合的解釈を目指し討論を行う。

【話題提供1：数量能力と手指の機能的連続とその変化(浅川淳司)】

数量能力は、抽象的な記号を操作する能力であると考えられてきた。近年、生得的に数量を処理できることが明らかにされてきている一方、生得的な能力には限界があることもわかっている。生得的な能力を拡張していくためには、数量の体系を学習していく必要があるが、このとき私達は単純に知識を記憶して学習していくわけではなく、身近な身体を使いながら、数量概念の理解を深めていく。数量概念の理解を深めていく際に重要となる身体が手指である。しかしながら、手指は10本という身体的制約があり、さらに大きな数や複雑な計算を行うためには、数字といった記号が必要となる。本報告では、数量能力と手指の関係が、どのように記号に置き換えられていくのか考察する。

【話題提供2：外的表象理解の発達における連続性と非連続性(木村美奈子)】

絵や映像などの図像的表象をシンボルとして理解する発達過程に関する研究では、その理解の達成の時期に、矛盾した結果が報告されている。図像的表象の理解は、表象機能の発達と密接に絡まり合いながら発達していくと考えられるが、これらの矛盾する結果は、「生得か経験か」の古典的な議論に立ち返らせ、また「発達」をどう捉えるかという根本的な問題にまで思いを至らせる。たとえば、表象機能の発達に質的な転換があると想定するか否かによっても、図像的表象を理解する過程についての説明が異なってくるだろう。本報告では、表象機能の発達に質的な転換を想定し、図像的表象に関する経験的知識との関連について議論する。

【話題提供3：生命概念の発達における連続性と非連続性(布施光代)】

子どもの生物概念や生命概念については、ピアジェによるアニミズム研究以降、主に素朴生物学の分野で検討されてきた。その中で、生命概念に対する「非生命概念」については、状態としての「死の概念」と属性としての「非生物概念」が区別されており、幼児では「死の概念」の方が遅れて獲得されることが指摘されている。また、児童の「生き返り」に関する認識を検討した結果、一定数の児童は人や動物が「生き返る」と認識していることや、「輪廻転生」に関する信念が多くみられることが示された(布施, 2019)。こうした「生き返り」や「輪廻転生」のような認識は、子どもだけでなく大人にも見られるものである。本報告では、子どもの生物概念・生命概念から大人の生命観について、連続性と非連続性を検討する。